



## 「鋭きも鈍きも共に」

2023年5月

中山 昇 (1925～2019 \*学園創立者)



あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互いのために役立てるべきである。 (ペテロ第一の手紙 4章10節:日本聖書協会1954年改訳版)

今回は一人ひとりに与えられた個性ということを考えてみたいと思います。

幕末、日本国中が攘夷か開国かと物情騒然とした中で、若者の心は未来を見つめ沸き立っていました。知識を求め知恵を磨こうと文化の発信源である諸塾に集まりました。中でも幕府の学問所や藩校よりも私塾の個性ある教育に引きつけられていったことが注目されます。孔孟の教えを掘り起こして憂国の志士を育てた山口県・萩の松下村塾、新しい文化を洋学に求めた大阪の適塾は有名ですが、私は大分の咸宜園(かんぎえん)に常に心を引かれてきました。あの九州山脈北端の日田山中の一私塾に、どうして延べ五千人もの若者が笈を負うて集まったのでしょうか。塾生には高野長英や大村益次郎の名も見えます。そこには時代の夜明けを告げる自由で個性的な学風があったからだと思います。その名の咸宜園は象徴的な命名です。「咸」とは「みな」と読み、「宜」は「よろしい」という意味です。志をもって勉強したい人は誰でも、皆よろしい、おいでなさい、共に勉強しましょうというのです。塾長の広瀬淡窓先生は「三奪」を入学の条件とされました。第一は年齢を問題にしない。第二は他の学歴を問題にしない。第三は家柄を問題にしない。スタートを同じくするということです。

当時は階級制度が固まっていたのですが、誰でも学問することは必要なことであり、それに気づいてやる気のある者は誰でも来なさいというのです。だから咸宜園なのです。

### 鋭きも鈍きも共に捨て難し、錐と槌とに使いわけなば

身分だけではない、能力や性格の違いでさえも甲乙はつけない。それぞれの長短を見極めて、その持ち味、個性を生かせば、無用なものは誰もいないという人間理解が根底にありました。

### 道(ゆ)をやめよ他郷苦辛多しと / 同僚友あり自ずから相親しむ

### 柴扉曉に出ずれば霜雪の如し / 君は川流に汲め我は薪を拾わん

この日田の山中に来て、辛いなあと言うことはやめよう。友情に結ばれている仲間の絆は固い。早朝、塾舎の外は霜がおりて雪のように真っ白だが、君は川の水を汲んで来てくれたまえ、私は林間で薪を拾ってくるから。

園生の互いに励まし合って勉学している心意気が伝わってきますね。この学風は一人ひとりを大切に個人の人格を心から尊重し合って、つとめいそしむところに生まれてきたものでしょう。

清教学園のめざすものを私たちはこの精神と同じ軌道の上においています。

淡窓先生の和歌は、大工道具に友だち関係をなぞらえて語られているわけですが、聖書ではこのことを人間の体と部分で説きあかされています。コリントの教会では不幸にも派閥ができていてお互いに相手を受け入れようとしなかったし、蔑んだり妬んだりしていたようです。そんな思いに対して、一人ひとり一つの中の部分同士の関係だということに、目を開くことをすすめられます。

「体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が『私は手でないから体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。耳が『私は目でないから体の一部ではない』と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。もし体全体が目だったらどこで聞きますか。もし全体が耳だったらどこで匂いをかぎますか」

と問いかけてゆきます。人間同士の関係を正しく捉えることが大切です。個々の人間を個体としてとらえる時に生ずる対立や競争の関係は活力の一つの源泉ですが、同時に一つの生命体ととらえるときに生まれる共苦と共歎にどう結びつけ、どう生かすかです。清教学園では「賜物を生かし合う共同体」という形でこのことを追求していることを覚えて下さい。個性をその部分と役割の中で磨いてゆくのです。

(中山昇『みおつくしー若き日にあなたのつくり主をおぼえよー』[1995年]より「五月 個性の賜物」の章に記された文章を掲載)

\*配慮すべき表現が一部に含まれますが、執筆者の意図およびオリジナリティを尊重してそのまま掲載いたします。

